

うた
た
ら

2026.
March
No. 3/3

Utasona

参加者一覧 02
連作欄 8首の連作 自由詠 03
一首評 「そらよみ」 15
テーマ詠欄 「5」 16
まちがいさがし 19
短歌リレーコラム 「望遠鏡」 20
リレーエッセイ 「いちごいちえ」 22
次回予告・編集後記 23



- | | | | |
|------------|------------------|----------|------------------|
| 織部ゆい | @yui_oribe | 砂山ふうり | @saku_furi |
| 梶原一人 | @MrDekopin | 台風のめ | @ima_kaihi |
| 歌島孟 | @Sinn1990 | 多香子 | @kohagi_tw |
| 片羽雲雀 | @anj192091554 | 千原ノハネ | @urato_kei |
| 涸れ井戸 | @kaionjioe | 十浦圭 | @you_chun25438 |
| 氷乃銀猫 | @Sibernekatz_e | とんだ杯食わせ者 | @nato_raku |
| 氷谷雪 | @kitaya_misoniso | 内藤うく | @sv_ve |
| 橋高なつめ | @cocconutkikko | 中野カナ | @nakam8 |
| 香子 | @kyoko_shogi | 中村成志 | @nememo_0_yune |
| 久保田毒虫 | @dokkum44 | ねむねむね | @nakamada_shuka |
| 栗子守熊 | @kurikoalavzb | 袴田朱夏 | @nemo_0_yune |
| くろだたけし | @tkuro2016 | 畑 依裕 | @aie0himeco |
| 高野時 | @flour70percent | 薄荷。 | @niyouguchi_dot |
| 桜々くろ | @w159f8nwfulvq3 | 非常口下ット | ルオ |
| Sand Pawns | @alen_fres | 平本文 | @hirochin_dos |
| 西鏡 | @xi_zhen_ivUT | 廣珍堂 | @_16164_ |
| 寿司村マイク | @xHksbNR4wv1wj8M | ひろひろし | @momoka_fukuyama |
| 須藤純貴 | @junki_poem | 福山桃歌 | |

計58名

たくさんのご参加
ありがとうございます！

連作欄 8首の連作 自由詠

#うたそら

無月ランタン

明里水也

かけられぬ電話の前で立ち尽くす雲間の月を待ちわびている
月暈の間だけ待つところからきみの名前が消え失せるはず
駆け抜けてゆくネオンの向こう側の朧の月の夢の通い路
忘れられないでいる手紙の前で知った中身もお月隠れ
寒月をみる隣にいる熱と明日も生きゆく未練もなくて
狂おしく望む金色キャンディの甘さをずっと眺めていたい
おやすみといて小瓶に落とし込む今日の願いは叶わなくて
最低の土に寝転ぶ無月かなやまない雨ももう明けるだけ

Distraction

井倉りつ

野うさぎのティーパーティーの招待状届いて訪ねる森の隠れ家
ゆきずりのかたつむり 鳥のあまやどり びしょ濡れでかけまわるリスたち
雨の音 風の音 立ちどまるシカ 今日のはあの人来てないのかな
「探してるうちは見つからないよ」ってうさぎがわたしに耳打ちをする
おもしろくないのになぜか笑ってることに気づいて顔が見れない
退屈に飽きたうさぎのするキスは驚くくらい味がしなくて
雨が止むまでの約束 冷めきったカップに出過ぎた紅茶を注ぐ
外ばっか見ててごめんねうさぎってどのくらい淋しがらせたら死ぬ？

「詩想に恐れをなして」

石川順一

ガオー散るガオー輝くガオー嘘ガオーの血脈床に零れて
水滴が床をちりばめ足で拭く吸水力有る星の靴下
円覆う楕円は途中で途切れたりレモンが浮かぶ湯船の中で
入れ物と中身が一致しないときニザンの小説思い浮かべる
十五度の部屋で柑橘類にカビ早く捨てねば百合を挿せない
スイスイと海老いて行く悪夢かな背が伸びなくて「猿」^{ましち}を読めず
蚊が全部居なくなるのが冬の空常緑樹には鳥の巢作り
意図無くてレーサーに掛ける祝福は風強き日は土曜日に来る

終わったとして

いわかみあ

タルタルでなくて時間が冷やしてたチキン南蛮、もう置いたまま
もう終わり 聞きたかったこと、聞かなくてよかったことの方分からず
端まで泳ぎきれない広すぎて どうでもよくて、仕草とか息とか
恋をした 恋をしたこと物語の出来事ばかり思ってきたけど
水遣れず寝込んだように見る鉢の枯れても生きる緑うつくしい
恋という風に吹かれた翌日に春のカーテン掛け替えていた
手びねりの皿のゆがみが気に入られ毎朝のこと愛用されてる
君とまだ話していたい 夜食にはビーフンがいい？焼きそばがいい？

君に逢いたい

織部ゆい

駆けつけて励ますわたし「救われた」そう言う君は救済だった
共通のものと思っていたけれど今なら気づく君だけだった
跳ねのける人がほとんどだからこそ君の優しさ特別だった
君ほどの素直な人の喪失が辛くて涙止まらない夜
ラブレター送るそのたび編む絆やさしい涙きゅつと結んだ
何度めの絶望だろう苦しいよ君の優しい記憶溢れる
迷惑と初めて気づく怖くって弱いわたしは言葉に鍵を
あの頃に戻り手を取り泣きたいよ君に逢いたい泣き祈る夜

廃村

梶原一人

薄明に御告げは在りて隣人の隣人は人 我が子は何
吊られたる父の遺言の口惜しさ口寄せすれば白き魂
教会の扉は赤く血塗られて折れた剣と平穏な朝
預言者は夜ごと夜更けに顔洗う道化師の顔晒さんとして
老人は音を立てずに若木樵る己が入るべき棺桶のため
魚屋と肉屋の嘘をはかりかね間をとつて弁護士を吊る
子と我と母の三人見つめあいまず手始めに預言者を喰う
美しく尻尾を洗う若妻の裸体見たりて廃村となる

屋上獲部31 ラスクとアクム

宇祖田都子

食パンをバターで焼いて塩を振る（もちろん砂糖でもかまわない）
「こぼさないように食べるのむずかしい」ラスクの屑をはたいて笑う
バクのおむアクムのかけらサクサクと音立て拾い集めて帰る
焦がしたらバクにアクムと偽って食べてもらえば大丈夫だよ
呼び方を変えたところでラスクってやっぱり固いパンだと思っ
あ、そうかアクムは硬いパンだからバクはラスクの匂いなんだね
大量のラスクひたすら食べる日は二人で回し飲むココ・コーラ
わたしたちの今が青春だつてこと気づかないまま死ねたらいいな

居心地の悪い町

泳二

ボンネット積もった霜を指先で 思い出すこと、出せないこと
火のついた花火を手渡した時の距離と角度があなたのすべて
この町はドラッグストアとコンビニがいっぱいで居心地はよくない
少しずつこわれる世界うるさくて愛しいものであふれる机
居心地の悪い町にはたくさんの方がいて音楽が鳴ってる
風がもう少しだけ暖かくなって小さな声は届かなくなる
遠ざかることは大切銀色の車両に映る雲のオレンジ
居心地の悪い町でもこの風は春一番と呼ぶことにする

四君子になりそこねたワタシ

歌島孟

惜しみなく、あなたは誰の背中でも押しやまない春風でした
あまねいて垂れる慈愛へ皆人の酔ひてつどへる花の下蔭
しんしんとふりつむ悪をうち払い直く生きよとさす竹の君
離^{さか}りゆくあなたはひとり玉銚の道を正して一筋の矢
切るほどに雄々しく伸びよ梅の花 馬鹿と呼ばれて、なおも明るく
世はすべて虚ろとしても、汝^なを思うこの俺だけは真実なりき
まなざしは千里の先に死を見つめ、ひとり帷^{いあく}に沈思する君
とこしへに松は季節をへて朽ちぬ泰平の世を祈る葉の色

ウンディーネ

片羽雲雀

ひとりきり出ていくときの足音はピアニッシモで閉じられてゆく
伸ばせない髪にからまる禁忌ごと愛せだなんて燃えろよ燃えろ
猫つ毛の襟足跳ねるノスタルジー似た人を選ばないように
捨てられた長さの足りぬ目鏡また誰かしら傷つけそうで
かすみ草にも似た疎外感ぬぐう苗字が変わるドライフラワー
本当の理由を包むオーガンジー鉄を入れても殴れない
海沿いの線路に沿ってうなだれる少女の髪を撫でる私が
骨壺を見送るたびに押し寄せる悔悛を殺して息を吐く

代書屋を

涸れ井戸

買い過ぎたカップ麺パン夜勤中どう食い尽くす？全力思索
 効率を顧慮し汚れものは朝に腰痛のため早めに横に
 転職をして良かったと布団出し消灯もしてつくづく思う
 食べるいりこ黒豆しぼりオードブルきな粉と胡麻のげんこつ飴も
 夜食とはリラクゼーションでもあってデザートは酢昆布とマシユマロを
 おにぎりとおパンとラーメン三時間ごとに咀嚼しごぼう茶を飲む
 代書屋をやって糊口をしのぎたいあと五時間でバイトは終わり
 ワイファイを拾わなくなったスマホを早よ替えんと朝日に誓う

気付いたら崖を歩いていろ

氷乃銀猫

引きこもりやめて外出るきつかけは帰ってこない猫探すため
 往來の真ん中に立ち人類を威嚇する蠅螂かまきりの気概よ
 暑すぎるミンミンゼミが鳴きすぎるアスファルトは異世界へ続く
 ひまわりを見てるとまるでまるで夢咲いて咲いて咲ききって俯く
 ダリの絵に入り込んだら気にしない少しくらい心の歪み
 いまここに走るウサギが来ればいいそしたら逃げる口実になる
 幾許かの夢の結末 白黒を決めかねたまま猿に喰わせる
 脳もないナノな奴らの戦略に勝てる叡智を得る日はいつか

歯医者者を嗜む

北谷雪

大口で最後に笑ったのいつたっけ歯間フロスは一心にやる
 いい大人ならば歯医者に行くらしい痛くなくても褒美がなくても
 予約する声はよそゆき検診を嗜みと思うくらいは健康
 イメージを マスクに隠れたこの女医のおそらく見事なまでの歯並び
 子どもの泣く声はどこから こんなにも易々と口こじ開けられて
 何度も何度もコップの半量だけ満たす健気な水の仕事愛しむ
 「虫歯未満ですな」と言われそれつきり今日から胸にpenが棲まう
 ひとしきりつるつるの歯を舌で撫ぜ大口で笑いたいやそろそろ

ピンクのシャツと

橘高なつめ

待ち合わせ場所のあなたはすぐ見つけやすいピンクのシャツを着ている
 少しだけ言い争って忘れゆくランチの列に加わりながら
 いつもより爽やかそうに見えるのはミントの香る歯みがきのせい
 運命か必然なのか気が合うね老眼鏡を忘れた二人
 動き出す心の装置になるだろう壁にくまなく貼られたメニュー
 自家製と星が付いている一つだけ他は出来あいなのか疑う
 頼んだら学食なみに多かったコロツケ乗せてあるオムライス
 あまりにも春だピンクのシャツを着て桜の色のラテを飲み干す

nameless shapeless

香子

おおかたの選択終えた人生だこの道の果て見ていないのに
 尋ねたき事がグラスにあふれそう全て飲み干し大人の顔する
 駆け引きをできるほどには賢くないどの瞬間もまっさらな肌
 背負わせる重さは香車一枚分残りは私に引き受けさせて
 安心と孤独の両方くれた人あたしは何を渡せましたか
 手に入れたそばから零れ落ちてゆく夢の中ではひとりにならないで
 終わらせる引き金あるならその権利貴方に預ける貴方が決めて
 形にはとかく名前を付けがちで「名無しのままがいいよ」と思う

月明かり

高野時

夜風にも見えない潮は香るから海のある町なのだわかる
 碁盤の目だったとしてもひとりでは迷って辿りつけない路地へ
 揺られたら溢れるほどの夜の川なみだはどこへしまうのだろう
 水としてあるいは鳥の声としてわたしを淡く詠まれていた
 地下鉄の青い柱を縫うようにたぶん人魚も少し歩ける
 トンネルの遠い出口の明るさが目に沁みてる満月の夜
 消えないのだけれど罅があつたから継がれた線は黄金きんに光るよ
 許したい 月よりずっと重くなる丸い身体のこともいつかは

月から届く

くろだたけし

あたらしい呼び名を望む気持ちなどあるわけもなく枯れ葉は落ちる
 感情のない明るさで鳴いている小鳥は命をかかえた機械
 あしあととはそこからずつと動かずにあしおとだけが月から届く
 夜をゆく道はなくとも四つ足の獣がほこぶ獲物のガラス
 背負えない負債は放棄していいと地球最後の人に言いたい
 地下室がぼくにあったら地下室にぼくを隠してとぼけたかった
 月光は百年かけて人を殺す青白く濡れる土地に眠れば
 かたくまで待つってと言われ待つっているそれが海だと気づいたあと

スライドショー

桜さくら

桜咲くビールを提げて現れるあなたは春の共犯者かな
 透明な袋につもるリンドールおとなの欲を乱反射して
 わたくしの好みのビジュを保存する締め切り前の PowerPoint
 ダークスーツのフロアーヘブンピースから春を散らして講演に立つ
 如月の短詩のようなあいさつをかわし情報交換会へ
 偶然はいつからなのか再会にめくられる濃い学生時代
 酌みあいて色に出したしわが酔いと物や思える電池残量
 鈍の刃に雨のしずくのひかるころ冬を灯せる炎を終う

月に似ている

西鎮

だれだかの鎖骨を思う西風が氷柱を曲げる土地で暮らして
 まる裸の公孫樹のしたで泣いてみる奏者へもたれるチェロの姿勢で
 歩道橋チヨコレイトで越えた日のみずうみみたいな街のやさしさ
 コーヒーはもう冷めていて報復のような静謐だけゆるした
 あの春に無断で借りた父さんの腕時計にもあたらしい春
 あとがきを数行未来のごとく読み第三章にふたたびもどる
 太陽がさきに帰った居酒屋で惑星同士つつく鶏わさ
 たぶんぼくよりも孤独につよいから猫の瞳は月に似ている

大きな青いトラックが来る

寿司村マイク

生チヨコを知らないぼくの住む街にロイズの移動販売が来る
 夏休み旅行で行った子が言った「ポテチにチヨコのかかっているやつ」
 両手から袋を下げてステップを女の人はゆっくり降りる
 奥までは見えない扉をこづかいで買ったノートの1ページ目に
 ひよろびよろと吹いている威風堂々が止まり やり直す 最初から
 読み方を去年習った 駐車場の中からトラックは消えている
 上手くなる青鉛筆のトラックに黒で書きこむ札幌さっぽろナンバー
 荷台には何箱並んでいたんだろうスナックパンを頬張りながら

初恋成就

多香子

遊びしは「花いちもんめ」幼くてわけもわからず君を欲しがり
 帰れない昔のふるさと小川にはとんとん板橋架かっていたが
 背伸びしてみても見えないビルの陰あなたの白い窓のカーテン
 イメージは成功だけど実際は失敗すること恐れている今朝
 きみがため心づくしのお弁当三割増しの評価がほしい
 浅漬けをバリバリと噛む音が好き あなたの瞳が輝きだしてる
 初恋の痛みにも似て凍る夜の三日月そつとふところに入れ
 どこまでもその手を取りて離さずに椿散る道行こうと思う

春だった

千原こはぎ

約束はなんにもなくてまたひとつ落ちた花弁をシンクに流す
 ふれないでいればいつしか炭酸は抜けてしまつて さよならなのか
 やわらかなことばばかりを手渡してくれるせい だいじだと思つた
 春だったあたたかすぎるひとだった 冬の角度で見たらわかつた
 いつまでも効かない暖房 がらんどろ、つたたとえばこういことなんだろう
 また雪は降るんだろうか三月のひとりになったあとのはればれ
 五百円で数本の花束を買う わたしはわたしにやさしくしよう
 こうやつて生きていくんだ 納得も実感もないしずかな了解

S (UNAYAMA) F 帆紫

砂山ふうり

抱っこするきみの光りがだんだんと実体化して千の折り鶴
 美しいひとがカモメに投げているかっぱえびせん海に落ちない
 ピアノから海が広がり出したときゆびの間をイルカが跳ねる
 あちこちの歯の隙間へと刺し込んで砕いた葱や、鳥、豚、を見る
 兩粒の一つが羽を広げればわれわれもと観覧車に雪
 水曜に火曜日のこと引き摺ってまだ引き摺って月を見ている
 一マスの室に入ればポストンを句点のように室隅に置く
 睡蓮の蝶の交尾に息潜めチャーハンおむすびぼろぼろこぼす

プールサイド

台風のめ

あぶくから思い出ばかり匂い立つこの晩だけは赦してほしい
 ペッチョリと床にはりつくチヨコレイトの六歩目にピアスホール
 小刻みに震える指で「愛してる」書いては捨てる センパイへ、ぼい
 身包みをはがされてみて心地よく沼におぼれる赤ちゃんみたい
 甘たるく溶けていようよ、とさそわれて毛穴のぜんぶ液体にする
 試験紙をすこし啜えて染めあげてはピンクの空を舐める skype
 FAXをのたくるミミズ 喰えと言う紙の白さのいやらしさよ
 バレンタイン どうして男はおしなべて送金口座を送ってくるのか

月に傷跡

十浦圭

上弦の月を見ている 遠吠えはさびしい時の最後の手段
 免罪符 ナイフ 月光 正しさも馴らせば痛くなくなりますか
 正しさに触れれば切れる指先もいつまでもやわらかくいられない
 眠れない夜のたび折り続けてた紙ヒョーキのかなしきしらべ
 いつまでもあなたのための讚美歌をあなたの膝で歌いたかった
 傷つけば傷つく前より硬くなる指先 そういふ風に出来てる
 立ち向かうため握つてた掌をほどいたら花みたいと笑つて
 上弦の月を見ている まだ強くなれないけれど 月を見ている

月の満ち欠け

中野カナ

月は見えないが確かに在ることを信じているから人は死なない
 三日月の鋭い爪を薄雲に引つ掛け夜は柔らかくなる
 半分の月の光は頼りなくても美しい均衡がある
 完成を急がないでと言うように十三夜は背の後ろを飛んだ
 満月はこちらをずっと眺めてる頑張る人を照らし出すため
 また会えた生きてくれてありがとう立待月はあなたに語る
 有明の月を眺めて珈琲を啜る私は大人になりたい
 失くなった？隠れたただだよ大丈夫あなたの努力は決して消えない

怖さにわらう

中村成志

少しづつ手が食べられてゆくことの楽しさだろうピアノを弾くは
手ぬぐいの一本で拭く日の暮れの体すみずみ湯気吹き上げる
根菜を搾り下ろすとき指先に染み着く色の土の気配を
つまらないついで温もりが濡らす足たとえば漱石『門』のひたひた
断崖の際のきわまで続く道覗いてみたい人がいるから
さびしいと言われ続けてきた花のそれでも今年限りのにおい
石段の上で光を指させば天へと落ちる怖さにわらう
暮れ残る丘の林を麓より陽が削りゆくてっぺんへ向け

ヒーロー

ねむねもね

現実がない職業だけど子どもならば憧れを抱くテレビの中
助けてと叫んでもヒーローは来ない来るのは偽善者だけでした
ヒーローになりたいと思う大人はヒーローが来なかった子どもで
木の上で降りられないでいる子猫を助けたかった人生です
ありあまる血と一緒に元気さえも分け与えられたらいいのにな
今日もまた死に近い仕事をしに行く子どもに夢を見させていく
ことばだけで人を惹きつけさせる歌人はひよつとしたらヒーローか？
大人でも憧れを抱くヒーローになれていますか地獄のぼく

二〇二六年二月

袴田朱夏

あるべきは高市首相側からの党首討論設定要請
期日前投票にゆき期日には子とたつぷりの雪で遊んだ
六歳の背丈にすこし届かずにこのあと過去になる雪だるま
公約の雪に霞める選挙戦抜け道ばかり見せられている
民意そはわが意にあらず速報に見ゆる万歳三唱古し
自分にできる方法で面倒を避けた首相はやり手ではある
人よりはいつも大きい国だからこぼれてしまわないようにする
ためらう目 つづく高市政権が予算をつける機関のひとの

正しいきみの

薄荷。

風邪ぎみの耳にもやさしい低音でゆったりとしたきみの鼻歌
からすにも道を譲っているきみに何かいいことがありますように
こんもりと丸いあたまが好きだからきみの横顔ずっと見ている
カフェオレがゆっくり甘くなるようにきみの言葉の欠片を入れる
わたくしの細胞すべてにきみの名を刻みつけたい夜だつてある
今日の目を怠惰と名付けてわたしたち雨のかなでる音楽を聴く
連体のさいごの日には液体のかたちで過ごす時間がほしい
ねむるとききつと感じる右耳に正しいきみの正しい鼓動

↑ ↓

非常口ドット

鉢植えのポインセチアが手を伸ばし花卉が落ちたここから大地
名無し草庭の切れ端持ちながらわらわら生える実家みたいに
録画した冬の動きをなぞり跳ぶタンブルウイード春を指さん
誤字脱字あっても薔薇は鮮やかで初めて貰う赤いクレヨン
呼んだのはソテツ畑に舞う君だ僕に突つた想いの正誤
山脈の乱れた線の下で待つひとりぼっちの蕨の貫禄
逃げるのは負けることだと頑なな少しすっぱい若めのバナナ
位置につきドンで舞い散る桜たち針を刺したら帰れない蜂

春です

廣珍堂

「雨でせう」春の日暮れの予報士が囁きてをり襖の向かふ
やはらかき陽射しを受けて滲む窓結露のままにゆらめきてをり
ミスタイプすれば液晶止まりたり動作保証温度は蓄
カーテンにひかり射しきてゆらめくは草の気配と花のふくらみ
都会から戻りし列車は息を吐き青増す山を眺めてをりぬ
今日はもうフェイクタイツを脱ぐらしい脚は白さを熟成させて
午後からはやはり寒さが戻り来て合格通知はさまよつてゐる
ランドセルはキヤメル・藤色・空色だ新一年生びよんびよん跳ねよ

退院

平本文

退院してできることからはじめようちよつとずつでもちよつとずつでも
階段の上り下りがきついでそれでも歩く体力回復
毎日4000歩は歩こうと決めた私に付き合ってくれる父
朝起きてコーヒーを飲むその時間とてもしあわせ私の時間
退院し2週間が過ぎました前を向いて歩いていこう
父親と散歩をしているその途中近所のおばあちゃんに出会う
ラジオから流れるアナウンサーの声とてもやさしくとても丁寧
薬減り体調戻りよく眠れ落ち着いている私の心

はないちもんめ

福山桃歌

心臓の重さをあげる きみからはからっぽのままの心がほしい
振るわれたことは鋭く研がれて最初から殺すつもりだったね
喧騒に押し潰された肺の奥きみの呼吸でする光合成
間違いを正しさとして飲み込んできみの弱さはわたしの強さ
世界とはふたりではないことを知り崩れてしまっほろにがプリン
明滅を繰り返してる月だからきみがいなくちゃ だれかがいなくちゃ
どしゃ降りの朝に飛び立つ鳥みたいどこにもいない朝日目指して
心臓を握ったときの手のかたち忘れないでね きみがすきだよ

花の記憶

古井 朔

花ひらくこともなかりき油彩のつぼみ器に活けられしルドンの花よ
 永遠につぼみのままの少女の横に枯れることなきモノの庭
 いつまでも雨の予感に満ち満ちてかつて睡蓮だった胎内の記憶
 快復の喜びいつしか退色しゴッホの薔薇も白くなる
 ルノワール最期のアネモネすこしだけきつと何かかわかりかけてた
 微笑みはミュシャの花束いつのまに黄金のドレス引き裂かれ
 初めから囚われし六つの花解き放たれなお拒み続ける
 エミール・ガレの蜻蛉になりて迎え入る幽けき光と朽ちぬ花々

はじまりをつくる

古井久茂

「おしまひ」をリュックサックに入れたまま今日もひとりアパートを出る
 傾いたプレハブ小屋の錆びた金具に絡みつくほそい風蘭
 しあはせな家族でしたとお聞きして今のあなたをお聞かせ願ふ
 枝先にほころぶ梅の蜜を吸ふメジロの上をツバメがくるり
 玩具のやうに歯を磨く薬用の洗口液で時間をかけて
 朝より早くやかましい工場の排気口へと猫が集まり
 種を蒔くひと月後には食べられる予定になつた二十日大根
 ひび割れた荒地の上をゆくように赤いタイルの通勤路へと

しろいろ

古河むき

スウェットの色はしろいろ へばつてるうさぎの群れに呑まれる日まで
 くつきりとした蛍光に飼われているゴシック体の健気な名前
 恐竜の化石は割と丸かった 貝はそのまま綺麗だね 月。
 午後八時二十三分イチ深い煙を吐いた(過去形)
 コンビニで貰ったスプーン明日より今日が大切みたいなカレー
 教えてよ日本語字幕があることでわかる映画のわからないところ
 掠れてる横断歩道が掠れてた横断歩道になる、おはよう。
 雪の日はどんな顔をしてただろう ばたばただとかかかしてほしい。

荷馬車が揺れる

まさけ

全日本二時間耐久通勤へ参加するため乗る四号車
 借りたのに進まずにいる本を読む 乗り物酔いと言う後悔
 たまに出る YouTuber の芸人が面白くなく面白くない
 もうこれは虚無中の虚無真つ黒な車窓に映るわたしの黒子
 眠つてる目も脳もまだ振動が追撃をする六時の車内
 開けた目で一番最初に見たものは親父の鼻毛 刷り込みの怪
 金色の稲穂がゆれる車窓から飛び出すわたしナウシカになる
 ドナドナをされて駅から追い出され子牛の瞳で会社に向かう

鎖

御糸さち

金のさら それとも銀のさらですか あなたの湖うみに沈めたものは
 靴紐を固く固く結び直して今がわたしのCOCOCO壱番屋
 夜景には入れてもらえぬサブウェイのこんないのち運んでるのに
 王様には見えない紐でくくるけどそれを絆とあなたは呼ぶの
 今のそれ何コマダった? 奪い合うからお互いにずっとタリーズ
 夜モスから歩き続けるマックらな道ほんとうに道なのかしら
 来ないこと分かっているもこの場所で 松屋 松のや いつまでだって
 一度しか言わないからね一度だけしっかり聞いてちょうだい すき家

体重が4キロ減った話

水上歌眠

人生で橋から落ちる日があれば今日かもしれない小走りでゆく
 喉元に重心ひよろりと咲いており体重が減ったこと思い出す
 指二本ほどの時空をたわませて休み明けとは絹のゴースト
 うさぎにも鳥にも見える影を持つわたしも雲の類なんだろう
 ウイルスは生き物なのか調べれば調べるほどに いのちとは何
 (風のなかに置き去りにした気がします。今も公園でゆれている馬)
 桑ジャムを積んだボートを飛び越えてわたしがわたしに着地するまで
 なくしつづつ生きると思う。胸の前、それぞれの骨壺をぶら下げて

光をえらぶ

三浦なつ

メッセージ何度も消しては打ち直しきみへの重さを確かめている
 もう来ない連絡シャツにアイロンをすべらせ今日を整えてゆく
 悲しみの錘が取れなくなった日はソファーにすべてを委ねて沈む
 正論は効きすぎるから少しだけ嘘を薬に混ぜておきます
 少しずつ苗を植えゆくかぎ針をすすめるたびに花ひらくごと
 まだきみの部屋があります永久に借りつづけたまま忘れたような
 マグネットネイルを纏って指先をかざせばいつも光を選ぶ
 喪に服すようにしずかにうつむいて春の野に立つスノードロップ

春ってだけで

南の島

実りある新生活説く壇上に花は咲かない地に根身に夢
 抽選に外れて日頃の行いがとか考えるわたしが嫌い
 すねの青あざやか実感する命いたくなくなる社会のゆくえ
 空は青雲は白でしよ色々を見られぬ目にはならないでいよう
 店内でお過ごしですか 召し上がるよりも自分でいられる場所を
 一杯のラテでみつかる心ない冗談の交わり方泣き方
 目の前の人の体温上げること春ってだけで明るくなれん
 Life is rocky when you're a gem. やよなぶー 一つの時代を生きる

人里に下った熊の背に乗ってゴ布林どもの火事場泥棒
 強制猥褻を性的いたずらと称する如くいたずら小鬼
 採取社会のただなかに生き無垢な目と無垢な悪意で人里に出る
 山犬を連れだしたゴ布林集団の山犬飼育係のゴ布林
 人の目に醜いことがゴ布林が征伐される大きな理由
 赤黒い血しぶき上げるゴ布林と理解しあえたのかもしれない
 ゴ布林には右も左もわからない人の価値観にて裁かれる
 青空と赤黒い血だまりの地の間に宿るしばしの平和

冷蔵庫開ける機会を減らすべく物の配置を目に焼き付ける
 マヨネーズの口金からも星が消え近ごろの子は夢を持ってない
 高級なサラダ油がいつもより派手な拍手を聞かせてくれる
 咳ひとつくしゃみひとつに課税して隣家を少し黙らせてみたい
 泣くことも思い出になる甲子園みたいな旅にとんと出会わぬ
 「どちらかといえば仏式」 信教を明かすことなく義母は逝きたり
 不祝儀の一万円はピン札でこのまま祝儀袋に入れよう
 海をまだ見たことのない鮮やかな大漁旗よあれが目印

後悔をまぜてしまえば不可分で濁りが増していくミルクティー
 階段にむかうブーツの跡を追うあなたもいつか去るのだろうか
 車窓から冷気がしみて耳にくる打ち消すようにラジオをつける
 夕暮の二藍色の空だけは忘れずいたい、なんて言えない
 約束を破る妄想約束を破られるのも妄想であれ
 「ん」っていう相づちがカギで mysig を感じるようになった、今では
 濡れていく輪郭を目でただなぞる 振りむかなくていいよあなたは
 ねえボクから仲良しだからこのまま理想のままでも並んでいよう

いつだって優しいひとが傷ついてぼくは盾にも傘にもならない
 傍にいてくれた声と同じだけ独りになんてしたくないのに
 苦しんだ夜も換われはしないから健康な身が憎らしくなる
 結局は日ごと叩いたキーボード届く言葉は百にひとつだ
 流れてく文字列でいい日常は日常のままあるべきだから
 気がつけば朝までかかる長話出来る日待ち今はおやすみ
 隣にはいられないけど僕達はどこにいたってきみが好きだよ
 くだらない冗談さえもきらめいた雨上がりの日のように笑って

そらよみ



前号の「うたそら」から
 気になった一首をとりあげて
 200文字くらいで語る
 一首評のコーナーです

白味噌はやわくほどけて眩しさのない幸
 福がふたりの椀に

北谷雪

汁物の白味噌は、白と言うよりごく淡い褐色。味噌
 の粒子ゆえに、眩しさは無くむしろ光を吸い込む。
 そんな、落ちつく湯気を立てた椀を「幸福」の比喩
 にした。
 眩しさの持つ硬さや鋭さを、ふたりの間には求めた
 くないという心情が、伝わってくる。
 第二句、通常「柔らかく」「溶けて」と書くところ、「や
 わく」「ほどけて」と少々異質な表現にした事が、一
 首を支えている。

ほうき星になって走ったママチャリが乗り
 捨てられた冬の公園

橘高なつめ

ほうき星は願いを叶えてくれる星。誰かのためになり
 たい、そのために乗った自転車、今は公園にさび
 びしくひとり放置せられている。それは願いを叶え
 て不思議な力を失った結果なのかもしれない。でも、
 また走り出せば、力を取り戻して誰かのほうき星に
 なる、そう読むのは妄想が過ぎるのかもしれない
 けれど、そうであっても良いと思えるほど、一句二句
 の描写は魅力的で惹き込まれてしまいました。

仕事だけしてれば存在意義はある あ
 のか あるか 夜が長いな

千原こはぎ

主体は一生懸命働いている。夜遅く、どこかきつと
 明け方まで。仕事における忙しさは「充実」を意味
 することが多いけれど、自分の心が仕事で満たされ
 ているとき、かえって存在があやふやになる感じはな
 んだろう。社会が寝静まる夜間の仕事であれば、尚
 更その曖昧さは強まるのかもしれない。自問の末に
 自分へ言い聞かすような「ある あるのか あるか」
 に其感を覚える。もうすぐ冬が終わる。頑張ってい
 る主体を朝が迎えに来る。

「そらよみ」一首評募集

前号の「うたそら」からあなたのお気に入りの
 一首を引用し、その歌について200文字以内で
 お書きください。お一人につき一首まで。
 ご自分の短歌ではなく、他の方の
 作品でお願いいたします。
 公序良俗に反するもの、作者や
 他人の人格を傷つけるような投
 稿は掲載できませんのでご注意
 ください。

ご投稿はこちらの
投稿フォームから!



あたたかな言葉がずっとあふれ出る年の
 終りが冬でよかつた

宮下一志

仕事納めの一連だろうか、年末の慌ただしさのなか
 にある静謐を掬い取ったような一連「冬の挨拶」の
 最後の一首。所謂気づきの歌だが、「あたたかな言葉
 が出てくる(＝挨拶ができる)」から、半ば逆説的に
 「年末が冬でよかつた」と受け止める、その視点が
 まず美しい。またそこにはほんやりと、ある種の諦
 念も横たわっているように思える。これは、作品に通
 底した年末特有の感覚が効いていると思うが、どう
 だろうか。

- ◆ 全天を導く五つ星の夢 今日もぼくらはここに居るから
- ◆ ふと気づく五月の空の明るさに記憶の中のピアノが響く
- ◆ ダイと翔、Chooとコウに次ぐ5匹目の猫の名前を考えている
- ◆ 五割打つ男の目には渚有りビーチを走る犬には負けぬ
- ◆ 五つ目の方角として「上」がある地球の底に住みぼくたちは
- ◆ 幸せが歩いてこないものだから三百六十五杯のビール
- ◆ クローバー君ばかり幸を見つけてる手帳に挟む光る5つ葉
- ◆ 5本指ソックス1指ずつ戻す今日もポイポイもう怒ったぞ！
- ◆ 五箇山は雪に閉ざされ四君子の竹とすがしく立てる落人
- ◆ ほろ酔いの五人囃子のうち二人元カレに似たフィンガリングで
- ◆ 五反田の漫画家志望青年と水道橋で会った寒春
- ◆ 5万円あれば取っとく欲しいもの君が教えてくれるまでって
- ◆ 春のこと話す炬燵で1匹のために5人が遠慮している
- ◆ ララララ五七五で歌ってる七七だけが思い出せずに
- ◆ 明里水也
- ◆ 麻倉ゆえ
- ◆ 井倉りつ
- ◆ 石川順一
- ◆ 宇祖田都子
- ◆ 泳二
- ◆ 織部ゆい
- ◆ 歌島孟
- ◆ 片羽雲雀
- ◆ 涸れ井戸
- ◆ 氷乃銀猫
- ◆ 氷谷雪
- ◆ 久保田毒虫



- ◆ 五つだけ入ったチョコの五つ目を自分のものと信じた四人
- ◆ 骨牌引きたちの集まるテーブルに積まれた五芒星のかたむき
- ◆ 二小節さきに休符が待っている五線譜みたいな出勤日です
- ◆ 五月晴れ僕が生まれたお祝いに貰ったおもちゃ今でも傍に
- ◆ 五時の鐘あなたは帰るのにアタシの口は金魚がぱくぱく
- ◆ 五年目のふたりを溶かしてゆくことば 溺れるほどのはちみつ、きみは
- ◆ 五時過ぎのネット裏から注意するボールのゆくえ次の監督
- ◆ 先生が描くはなまるの花びらはいつも五枚だね 桜好きなの？
- ◆ ♡5のバズらなかつたポストでも5人も私を撫でてくれてる
- ◆ 思わずきみへ寄り添いそうになった日の右足五本の指の踏んばり
- ◆ 地理Bの海のすべてに身をまかせ子らが波打つ水曜5限
- ◆ 5人組ヒーローならば6人目でこ入れに来るポジションでいい
- ◆ 午後五時のチャイムが響く堤防で（夕暮れ時でもさびしくないよ）
- ◆ ときめいた「五人そろって」赤色のリーダーよまたいつか会おうね
- ◆ 栗子守熊
- ◆ Sand Pawns
- ◆ 西鎮
- ◆ 須藤純貴
- ◆ 台風のめ
- ◆ 千原こはぎ
- ◆ こんだ一杯食わせ者
- ◆ 内藤うく
- ◆ 中野カナ
- ◆ 中村成志
- ◆ 袴田朱夏
- ◆ 畑 依裕
- ◆ 薄荷。
- ◆ 非常口ドット

ほっとひととき 短歌で
まちがいはなし

テーマ詠から拝借した
短歌をもとにして描いた
イラストのなかに
10個のまちがひがあります
見つけられるかな？

!!tanka!

二小節さきに休符が待っている五線譜みたいな出勤日です

西鎮



Illustration: 千原こはぎ @kohagi_tw

4人がけの席に5人で座るだけ放課後特盛ラーメンを食う
 五番街父がクルマでかけていた 口ずさみつつ帰京していく
 十四、五のひとつときだけのきみ臍もう会うこともかなわぬ夜の
 五線譜にかかれぬ音を紡ぐひとオスだけ青いルリビタキ
 五本ヅノ生やしたくらげの水槽が小学校で展示される日
 背番号5を見つけると心臓が555と鳴って知らせる恋人
 祖父祖母が威厳のために買い付けた五月の武者が怖いと言われ
 余命五年と言われてからの三十年を祖母は記憶を捨てながら生く
 ひらがなの練習をする五歳児が「いのちがつかれた」とつぶやけり
 5票差でつかみそこねる赤い薔薇 有権者らの背は諦め
 いつもあるパック団子にこどもの日シールがついて九十五円
 五里霧中一寸先は闇の世で永遠を誓える度胸はなくて
 57577です、と告げるたび、ああ俳句ねと言われる田舎
 五年目の職場はまだ居場所ではなく六年前の背中に続く

- ◆ 廣珍堂
- ◆ ひろひろし
- ◆ 福山桃歌
- ◆ 古井 朔
- ◆ 古河むき
- ◆ 真岡まな
- ◆ まさけ
- ◆ 御糸さち
- ◆ 三浦なつ
- ◆ みおん
- ◆ 南の島
- ◆ 宮嶋いつく
- ◆ 森内詩紋
- ◆ ルオ

望遠鏡

31

短歌にまつわるあれこれについて

自由きままに書くページ

今号のテーマと書き手さんは…



書き手

小川未夜子

テーマ

夢女かく語りき

夢小説と短歌の一人称／二人称

この世にいない人を好きになる沈まないレモン
サワーにレモンの舟は / 小川未夜子

この二首をふくむ、〈夢〉に関する短歌を初めて発表したのが約一年前だが、「珍しい」「新しい」というふうに評されたのが印象に残っている。夢小説という言葉を知っている人の割合が、この文章を読んでもくれる方のうちのどれほどなのか、見当もつかない。そしてまったく知らないという人に説明するのも、とても難しい。夢小説、夢女という語を孕む〈夢〉という文化は、狭いようで

プラス系夢小説における夢主の機能と驚くほど近い。

そもそも、勇気を出して言えば、主体と誰かの関係性を含む短歌に夢小説性を見出すことは難しくない。「一首の短歌を読むときに、「きみ」「あなた」など二人称が登場するとする。その相手が実際に存在するかどうかを毎回気にして読むほうが珍しいだろう。

作中主体と夢主がそうだったように、短歌と夢小説の二人称においても、限られた情報量のなかで大切なものがどの誰かではない。その作品内で相手がどのような存在なのか、相手がそこでなにをしているかだ。ただ、それに至るまでの工程は真逆なのが面白い。短歌では、登場人物紹介がない。あるのは作品だけで、そのなかで語られる部分しか「きみ」や「あなた」を形作るものはない。一方で、夢小説には原作がある。キャラクター名が書いてあれば、作中に容姿や設定が描かれていなくても、相手が誰であるか一瞬で共有することができる。二人称の背景情報がまったくない短歌と明確にある夢小説。真逆のふたつだが、作中での二人称の読まれ方自体は似通ったものを感じる。二人称の登場する短歌では作中主体との関係性が香るものが多く、夢小説は関係性を楽しむ創作形態の極みだ。

半透明の主人公という一人称を通して、二人称

包括的でもあるので。それでもこの文章のために、限りなく簡略化し、バリエーションの一部を切り落として無理やり話すと、夢小説とは、原作に存在しない人物を物語世界に挿入し、その人物と原作キャラクターとの関係を描く、二次創作だ。

二次創作の形態でメジャーなのは漫画やイラスト、小説だが、短歌や川柳などの短詩系を表現に用いる書き手もいる。一方で、榎原紘『推し短歌入門』（二〇二三、左右社）の発行以降に見られた「推し短歌」の隆盛によって、一次創作側からもフィクションのなかのキャラクターを詠むアプローチがされるようになった。しかし、夢と短歌の世界ではまだ実作者が少ないのかもしれない。少なくとも、一次創作側で発表している姿を、自分以外に見かけたことはまだない。

推し短歌、あるいは夢以外の二次創作短歌に比べて実作者が少ないといっても、夢創作と短歌の相性は決して悪くない。どころか、かなり親和性があるように思う。本稿ではその点について考えてみたい。夢小説には原作に出てこない人物が登場し、その人物は「夢主」と呼ばれる。「夢主」は「夢小説の主人公」の略だといわれている。短歌における「主」といえば聞き馴染みがあるのは「作中主体」という単語だと思うが、夢小説における夢主と短歌における作中主体は、あるときはすごく似た概念なのだ。夢小説にも色々なパターンが

である相手との関係性を描く。このように、すべての短歌、すべての夢小説がそうであるわけではないけれど、一部の短歌と夢小説は、かなり共通点が多いと感じている。ではなぜ一次創作側の短歌で夢の話をするものが少ないかと考えてみると、匿名性が低すぎることで、同時に高すぎると思いが当たる。匿名性が低すぎる、というのは、夢といえるのはほとんどの場合に何かの著作権作品のキャラクターなどという「お相手」が明確に存在する。そのため、相手が誰かわかるかたちになってしまいがちで、わからないように書くには注意が必要になるということ。対して匿名性が高すぎるというのは、相手がキャラクターであるということを書かなければ、それが夢なのかどうか誰にもわからないということ。創作投稿サイトのランキングトップに夢小説が並ぶことも多く、夢女という立場で創作に向き合う人は決して少なくない。もちろん短歌を作る人の中にもいるだろう。ただ、そもそも自分が夢女であることや誰か推しなのかを、一次創作的な短歌界で明かしたいと思う人が少ないであろうことは想像に難くない。

そんななかで夢女である私が選択したのは、相手が明確に誰かを言わないまま関係性だけを短歌に書くことと、夢という文化や構造について書くことだった。

あるのだが、読み手が夢主に「自己投影」しやすいものは近年「プラス系」と呼ばれるようになった。

プラス系の夢小説では夢主には髪型や目の色、名前などといった詳細設定が与えられず、ただ物語のなかでキャラクターの恋人、あるいは友人などの立ち位置や振る舞いだけが語られる。プラス系で主に描かれるのは相手である原作のキャラクターがどんな顔を見せるのかであり、夢主の個性を薄くすることによってどんな読み手にも自己投影される余白をつくる。プラス系の夢主は、半透明なのだ。そこにいるし、ましてやストーリーの主人公なのに存在が透けている。作中主体もそのような場合があるだろう。特に連作という流れや枠組みのないなかでは、一首の短歌において重視されるのは主体がどのだれで、どんな人間なのかではなく、主体を通じて描かれる世界だ。これは私性の否定ではない。短歌でも夢小説でも、「たつたひとりの私」は存在しうる。存在するからこそ、透けるのだ。どんな顔でどんな目の色でどんな性格で、という詳細がわからなくてもいい。そこに誰かがいる、ということだけで、読み手はすんなりと作品世界を受け取ることができる。作中主体というポジションにただ存在だけがあり、透けるからこそ三十一音という短さのなかに人の気配をまぜこみながら世界の描写に専念できる。このタイプの短歌は少なくないように思うし、これは

歳の差がひとつ離れることに雪きみが2.5次元になる / 小川未夜子

恋を夢と呼んだのはだれ 夢女という身分はわたしたちの爵位で / 小川未夜子

二人称を使って書く相手は二次元の存在で、わたしという主体は透けながら「きみ」を希求する。ここまで夢女として短歌と夢にまつわる話を書いてきたが、正直なところ、これからもっと夢短歌が盛り上がってほしいとか、増えてほしいとかは特に思っていない。自分にはたまたま夢の短歌をつくるのが人生に必要なだけだった。つくる必然性のない夢女に、無理に夢の短歌を作ってほしいとは思わない。みんな、好きなように生きていてほしい。ただ、わたしのよう夢の話を書き短歌で言うことが必要な誰かがいるとするなら、形にしてくれれば嬉しい。書いても、必ずしも誰かに見せないといけないわけではないので。

普段夢に関わりがない方にとっては、知らない世界の話だったかもしれない。短歌も夢も、縛りがあるからこそ豊かな創作だ。そのさわりだけでも伝わればと思う。



感想はこちらまで!

Twitter(現X)ハッシュタグ #うたそら

「うたそら」では Twitter(現X)でのご感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

短歌募集

2026. No. 32

26 4/30(木) 24時

8首の連作

テーマ詠「送」1首

一首評「そらよみ」

2026. No. 33

26 6/30(火) 24時

8首の連作

テーマ詠「海」1首

一首評「そらよみ」

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>

編集後記

梅の花があちこちで満開な今日このごろ、いかがお過ごしでしょうか。体調など崩されていませんか。5周年となる今号も、たくさんさんの素敵な歌をお寄せいただきました。テーマ詠のお題は「5」。ずらりと5な歌が並んでいてとても楽しいものとなりました。どうかお楽しみいただけますと幸いです。次号のメッチは4月末、発行は5月初旬です。テーマ詠のお題は「送」。皆さまの素晴らしい素敵な作品をお待ちしております!

編集鳥 千原こはぎ

今号のうたそら

2026. March No. 31

参加歌人様 58名

連作欄 46名

テーマ詠欄 42名

一首評 4名

リレーコラム 望遠鏡 小川未夜子 さん

リレーエッセイ いちいちえ 葉月ままこ さん

ご寄稿いただきありがとうございました!



illustration: kohagi chihara

31

リレーエッセイ

いちいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んでそれをテーマにエッセイを書くページ
 今号のテーマと書き手さんは...

来世

書き手 葉月ままこ

ねえもつと強くなろうよ 人生の主演になって大笑いして

葉月ままこ



葉月ままこ

ごくたまに、小学生の子供達と将棋を指すことがある。最近の子供達は駒が「成る」ことを「進化」とよく言う。おそらくポケモンの影響だとは思いますが、初めて聞いた時は素直に、うまいこと言うな、と思った。「進化!」と嬉しそうに叫ぶ子供達の姿は、それから私の密かな楽しみになっている。

そもそも、進化という言葉に私は敏感なのだ。なぜなら、人は皆、進化するために生まれてきたのではないか、とわりと真剣に思っているからだ。例えば、ポケモンやドラゴンボールの悟

空が進化をすると、姿形が変わり、戦闘能力が大幅にアップする。想像を超えた現象を引き起こすことだって可能になる。私が子供の頃は、スマホもパソコンもなかったし、今のようないンターネットの社会など想像もできなかった。改めて考えてみると、凄い世界になったと思う。ここまで文明が発展したことだって、言い方を換えれば人類が進化してきたからだとも言えるのではないだろうか?

以前、私が敬愛するミュージシャンの米津玄師が、何かのインタビューで、「自分のことしか大事にしてこなかった人間なので……」というような話をしていた。凄い言葉だと思った。長い間、周囲の目を気にしたり、親の意見に逆らえなかったりして自分の本音を押し殺して生きてきた私には、とても衝撃的な言葉だった。そして、彼が若くして大成している理由が、この言葉にあると思った。自分の事を何よりも大事にしてきたからこそ、彼は自分を見失わず、好きなことから始めることもなく、大好きな音楽や絵画のスキルを進化させてこられたのだと思う。

進化とはきつと、魔法でもなんでもなくて、たゆまぬ努力が必要なのだ。そして人が進化するためには、自分の好きなことをして、自分の個性を輝かせることが一番大事なのではないかと思う。そしてそういう生き方をしていくと、思わぬアイデアが浮かんだり、思いもよらない人との縁が生まれたりして、それが新たな世界を切り開いていくことに繋がっていくのではないかと思う。人の脳や遺伝子は約95%程度しか使われていないと聞いたことがある。ならばその眠っている5%が目覚めたらどうなるのだろうか? もしかしたら人間の体にしても、進化をすれば病気になるのかもしれない。

そういうわけで私は、未だ人類が見たこともない世界を生み出すことに一ミリくらいの貢献をするべく、そして願わくば来世も米津玄師のいる世界に生まれ変わるべく、今日もコツコツと短歌を作り続けるのであった。



うたそら 第31号

発行：2026.03.03

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>